先人に学びながら進める計画づくり

裏田 和夫*

東京慈恵会医科大学医学情報センター

発足時の将来構想

「日本医学図書館協会六十年略史」に当時の加盟館の現状が紹介されており、そこに当センターも掲載されている¹⁾。その記事は明治18年に成医会文庫としてスタートして以来の歴史を概観しているので、ここでは最近の当センターの状況を紹介することにしよう。

医学情報センターは、大学附属図書館、同標本館、史料室、中央写真室を包含し、1984年4月1日に発足し、もう既に12年を経過している。発足以来、従来から引き継ぐ4つの部門は、それぞれが担当するサービスの改善と発展に努力する一方、部門間の知識・技術の交換、運営組織の整備を行ってきた。そして、1986年10月よりセンター内に将来構想を検討するプロジェクト・チームを編成し、今日の医学情報サービスの動向に照らし、今後の医学情報センターはいかなる基本機能を持ち、いかなる運営方針を有すべきかに関して大学へ提案を行った。Matheson-Cooper Reportが発表されて、IAIMSプロジェクトが米国で進められている真っ最中である。大学の基本的了承を得たこの構想では、基本機能として、従来の図書館サービスの延長上に考える情報サービス、標本館や写真室機能の発展を含め、拡大的に計画したコミュニケーション・サービス、情報利用・処

理に関する知識・技術を教育する教育サービスの3つをあげている²⁾。

今日の展開

現在、センター長（他の講座との兼務）のほか、専任教員3名、司書14名（国領分館を含む）、研究技術員4名、事務員4名の計26名の大所帯である。なお、今年（1996年）1月、大学として正式にセンターに医療情報研究室を設置し、講師1名を専属とし、教員1名、研究補助員1名を追加する予定にある。

さて、前述の構想に沿って今日も活動が続け、最近は次のような展開をしている。

1. 情報サービス

日本医学図書館協会の年次統計にこの側面の活動結果を報告しているので、省略するが、図書館を中心とした情報サービスは医学情報センターの最も中心となっているサービスである。CD-ROMの利用をはじめ、学術情報センターの諸システム、科学技術振興事業団（旧・日本科学技術情報センター）、国内外の情報サービス会社が提供するデータベースの利用は日常化しており、最近はインターネット利用の環境ができ（本学のシステムを当センターが運営）、有効利用を試みつつある。また、昨年（1995年）秋に当センターが位置する西新橋キャンパス以外の国領キャンパス、他の2つの附属病院への文献複写サービスの

*Kazuo URATA : 〒105 東京都港区西新橋3-25-8.

(1996年9月30日 受理)

迅速化を目的としてG4規格ブックファクシミリによるネットワークを形成し、好評を得ている。

センター発足以降、情報サービスの今日の展開に追いつくようにと、コンピュータをベースとしたサービスに、あるいはシステムづくりに力点を置いてきたものの、反面、サービスを支える基本的な問題の解決に積極的ではなかったことが反省させられている。例えば、蔵書の増加と収容の問題、資料収集の選定方針の明確化、患者や一般住民への図書館サービス、など、至急に解決に向かわねばならない問題が多い。

2. コミュニケーション・サービス

写真室は、従来から学内者から原図を持ち込まれたもののスライド作成、患者病変部撮影、医学特殊撮影、ビデオ編集などを担当してきている。このスライド作成サービスの一環として、3年前

よりコンピュータ・グラフィックスによるスライド原図作成サービスを開始した。セルフサービス方式にしているものの、統計や画像作成ソフトウェアに関する質問がセンター員に頻繁に寄せられている。コンピュータ・グラフィックスを利用したスライド作成は、1995年度には21,032枚にもなっている。

標本館においては、教育用医学標本（マクロ2,593点、ミクロ2,548点）を中心に管理し、閲覧に供するとともに、医学視聴覚資料3,533プログラムを提供している。ここでは、学内で開催される学会や研究会に使用される種々の備品類、機材の貸出というユニークなサービスも提供している。

3. 教育サービス

センターの専任教員は、教育と研究に専念していれば良いというのではなく、センターの業務を遂行する一員であり、職員との勤務および業務上の区分をしてはいない。したがって、医学情報センターとしては、教育を情報の利用と処理に関する知識・技術を利用者に身につけてもらうためのサービスとしてとらえている。以下の諸プログラムを提供しているが、大学の正規のカリキュラムは教員が主となり、職員が補助し、種々の公開コースはむしろ職員が中心になって開催している。

① 医学科ならびに看護学科2年生に対する情報科学＝コンピュータを利用した情報処理の入門編。各学科90分、15回。今年度より開始された医学科新カリキュラムにより、情報科学はⅠとⅡに分かれ、Ⅰは1年生に対する情報処理入門、Ⅱは3年生に対する医療情報学となり、今年度は移行期のため標記も担当しているが、1998年度よりⅡを担当する予定である。

② 大学院共通カリキュラム医療情報コース＝研究者としての研究法の基礎を学ぶ場として設けられており、その中で当センターが担当する医療

情報コースが2週間、朝から夕方まで続く。

③ 看護専門学校（西新橋・柏）＝3年生に対する情報科学。3コース各90分、15回。

④ 種々の職種に対する公開コース＝新入医局員、若手研究者、コ・メディカル・スタッフなどに対して、おのおのの職種に応じた内容で開催している。文献情報に関するものに限ることなく、コンピュータ・グラフィックスに関するものや、大学雑誌編集委員会が主催する形で医学英語論文の書き方講習会も毎年開催してきている。

今後の進め

既に触れたが、サービスやサービス・システムづくりを優先的に考えてきて、基本的な土台づくりの問題をなおざりにしてきたことは否定できない。ややもすると現時点で好評であるサービスを停止せざるを得ないはめになるかもしれない。当面は新しい土台を構築することに大きなエネルギー

を使うことになるだろう。

そして、土台を構築しながら、他の機関とは少し異なった多様なメディアを担当する当センターのユニークな立場を活用して、発展させ、そして本当に慈恵医大の情報センターとして成長するには何をしなければならないかを、当センターのスタッフ全員で検討していきたいと思っている。Matheson-Cooper Report や協会から翻訳出版された「行動への挑戦」を読み直す必要もあろう、現在刊行中の米国医学図書館協会の Current Practice in Health Sciences Librarianship もきちんと読む必要もある。決して狭い井戸の中だけで考えず、優れた先人に学びながら進めたいと思う。

参考文献

- 1) 日本医学図書館協会六十年略史. 東京：日本医学図書館協会, 1989 : 181.
- 2) 裏田和夫. 統合型学術情報管理システム計画化へのアプローチ. 慈恵医大誌 1989 ; 104 : 303-17.